

中国経済クラブ（角広敷理事長）は28日、広島市中区のホテルで講演会を開いた。長崎大熱帯医学研究所教授の山本太郎氏が「Withコロナの時代の見取り図」と題して講演。感染症のパンデミック（世界的大流行）の歴史に触れながら、新型コロナウイルスとの向き合い方を提言した。要旨は次の通り。（田中美千子）

Withコロナの時代の見取り図

長崎大熱帯医学研究所教授 山本太郎氏



「新型コロナウイルスのパンデミックは社会を大きく変革する可能性がある」と語る山本氏

社会の変革 在り方考察を

新型コロナウイルス感染者は世界で2千万人、死者は80万人に上る。恐らく根絶できない。では、どう向き合うのか。パンデミックの歴史から考えたい。

1918年に流行したインフルエンザの一種「スペイン風邪」は、米国の東海岸から広まった。18年は第1次世界大戦の最終年。米国の兵士が欧州に渡ったの

が原因だ。流行の波は3度あり、日本でも当時の人口の4割が感染した。飛沫から感染するのは新型コロナウイルスと同じだから、今回も人口の3、4割に広まれば最終的に収束すると考えられる。

収束にかかる時間は対策に左右される。何もせず一定人口が感染するのを待ち、集団免疫の獲得を目指す方法は早い収束が見込める。ただし感染者が急増し、医療崩壊につながる恐れがある。命が選別され、社会全体で弱い人を守るという倫理観が失われかねない。

日本を含めた多くの国が取るのは、感染を制御しながら穏やかな収束を図る方法だ。ウイルスの強毒化も阻止できる。こちらが目指すべき方向だろう。

そもそも感染症はいつヒト社会に入ってきたのか。数十万の人口規模がないと流行はしない。農耕生活が始まり、人口が増加。そこ

にきて野生動物を家畜化したのがきっかけとなった。例えば天然痘はウシ由来、インフルエンザはアヒルか豚由来のウイルスだ。

ここ50年で見ると、新型コロナウイルスを含め、多くの病気が度を越えた頻度で出現している。開発の名の下、人

間がさまざまな生態系に進出し、野生動物と人との距離が近くなりすぎたのが原因だ。自然との付き合い方に一種の警鐘を鳴らしているとも言える。

パンデミックは時として社会の大きな変革を促してもきた。例えば中世の欧州に起きたペスト流行では、病気を制御できなかった教会が権威を失い、強制的に隔離する力を持つ国家が台頭した。中世という時代の解体につながった。

「コロナ時代」に置き換えると、確実に言えることは、ITを中心にした社会が来るとのこと。その使い方をこれから考えていかなければいけない。感染防止のため行動歴を把握するなど監視的な目的のために使うのか。それとも距離を取るものが求められる社会で、人と人との近接性をつくるために応用するのか。決めるのは私たちだ。

パンデミックはアフリカや南米、南アジアでも問題になるだろう。国際協力の在り方が大事になってくる。経済的影響が実は遅れて出てくること、少子化による人口減少の中で「アフターコロナ」を迎えることも、次の社会の在り方を考える上で念頭にに入れておく必要がある。

してきている。森友・加計学園問題、「桜を見る会」疑惑、公文書の改ざんや廃棄など、枚挙にいとまがない。

疑惑や不祥事などが露呈するたびに、首相は「責任を痛感する」と神妙な面持ちで語りはしたものの、責任を取ることはなかった。

これらのあしき政治手法や姿勢は、安倍1強の長期政権が作りだしたものだ。その中で、政治に対する国民の意識も鈍ってきた面があるかもしれない。新内閣には政治の刷新、悪弊の一扫が求められるだろう。国民もまた政治を見る目を改める必要があるだろう。

道半ばの政策も

「政治において重要なのは結果を出すこと」。首相はきのうも信条を語った。だが「私の手で成し遂げる」と強調した憲法

改正は、議論が進んでいない。

北朝鮮に「前提条件のない首脳会談」を呼び掛けた日本人拉致問題の解決や、「2島先行返還」にかじを切ったロシアとの北方領土の返還交渉でも結局、成果を上げられなかった。

地方創生、一億総活躍社会、女性活躍、働き方改革など、内政でも多くのスローガンをぶち上げてきた。どれも道半ばで放り出すことになるため、首相は無念に違いない。

コロナ対応では、突然の一斉休校要請やマスク配布が混乱を招いて批判された。内閣「不支持率」が高まっていた。

主導してきた東京五輪・パラリンピックは来年夏に先延ばししたものの、コロナ禍で開催が危ぶまれる状況である。

7年8カ月にとんだ長期政権が何をもちえ、この国をどう変えたか。検証が必要だ。